様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 5 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2012
課題番号：２０５２０４４２
研究課題名（和文）コーパスを活用した英語シノニム・語法研究

研究課題名（英文）Studies on English Synonyms and Usage: A Corpus-Based and Corpus-Driven Approach

研究代表者
井上　永幸（INOUE NAGAYUKI）
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号：10232547

研究成果の概要（和文）：
本研究は 2008 年度から 2012 年度までの 5 年間に，日本人英語学習者が誤り易いあるいは迷いやすい 12 項目の英語シノニム・語法について，コーパスを使って母語話者が無意識のうちに行っている使い分けを分析し，英米の文献や参考書で取り上げられたことのない表現についても，日本人英語学習者がそれらを使用する場合にどういった点に注意すればよいかをふまえて，統語的特徴や意味的特徴を記述しようとするものである。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study is to, during the five years of 2008 to 2012, analyze 12 items of English synonyms and usage Japanese students of English often make mistakes in and are puzzled about, and to describe their syntactic and semantic features with a full understanding of the difficulties frequently encountered by Japanese students of English, using corpora with which even non-native speakers of English are able to probe into English produced by native speakers of English in their daily life and to obtain the opportunity of studying English expressions that are not provided in literature or references.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：英語シノニム，英語類義語，英語語法，英語文法，英語コーパス言語学，辞書学

１．研究開始当初の背景

従来から語法研究の分野でシノニム研究が行われることがあったが，英語の非母語話者にとって立ちはだかる壁も大きい。その現実を如実に表わすものが 2 ヶ国語辞典であろう。大きく発展を遂げてきた日本の英和辞典であるが，シノニム記述に関しては，どの英和辞典を引いても似たような説明しか見られないといった経験をすることも多い。このような状況をもたらした原因は，シノニム記述や語法記述を海外の ESL/EFL 辞典やシノニム・語法辞典の記述に頼ってきたからに他ならない。うがった見方をすれば，そのような海外の資料に当該表現の記述がなければ，

語法やシノニムの記述がおぼつかない状況であったとも言える。ましてや日本語を母語とする英語学習者の立場に立った記述説明など期待するべくもない。

申請者は幸運にも 1987 年に刊行された『ジーニアス英和辞典』（大修館書店）以来，『英語基本形容詞・副詞辞典』（研究社出版，1989 年），『ニューセンチュリー和英辞典』（三省堂，1991 年），『ニューセンチュリー和英辞典第 2 版』（三省堂，1996 年），『ジーニアス英和大辞典』（大修館書店，2001 年），『ウィズダム英和辞典』（三省堂，2003）〔「英語コーパス学会賞」(2003) を受賞〕，『ウィズダム英和辞典 第 2 版』（三省堂，2007）などの各種英語辞典の執筆や編集，加えて，『英語コーパス言語学』（研究社出版，1998），*English Corpora under Japanese Eyes* (2004, Amsterdam /New York: Rodopi)，『英語コーパス言語学 —基礎と実践—【改訂新版】』（研究社，2005）などのコーパス言語学に関する概説書の執筆や論文集の編集に関わることができた。また，1993 年 4 月から 1994 年 1 月にかけては，若手在外研究員（決定番号 5–若–73）としてバーミンガム大学（連合王国）とノルウェー人文科学電算処理センター（ノルウェー王国）においてコーパス言語学に関する研究を行う機会を得た。さらに，2004 年度（平成 16 年度）から 2007 年度（平成 19 年度）には，「コーパスに基づく英語シノニム・語法研究」というテーマで科学研究費補助金（基盤研究（C）; 課題番号 16520298）を得る機会に恵まれ，現在報告書を鋭意作成中である。このように，申請者は近年一貫してコーパスに基づくシノニム研究及び語法研究を行ってきたところであるが，この度，分析対象となるコーパスの範囲を広げ，より広い視野からシノニム・語法研究を行ってゆこうとするものである。

２．研究の目的

本申請は，平成 20 年度（2008 年度）から平成 24 年度（2012 年度）までの 5 年間に，日本人英語学習者が誤りやすい 12 項目の英語シノニム・語法について，統語的特徴や意味的特徴を種々のコーパスを使って分析し，日本人英語学習者がそれらを使用する場合にどういった点に注意すればよいかをふまえて，それを記述しようとするものである。

シノニム・語法研究にコーパスを活用する利点は，以下のように集約できる。まず，英米の文献や参考書にない当該表現についても分析記述できる可能性が広がるなど，母語話者による先行研究に負うところの多い現状を打破できる。また，少人数のインフォーマント調査では避けることのできないインフォーマント自身の個人差を吸収できる。さらに，最も重要なのは，母語話者が無意識のうちに行っている使い分けを分析の対象とすることができる点である。コーパスを適切に運用すれば，母語話者ゆえに見過ごされていた現象や言語事実を非母語話者の立場から客観的に明らかにすることが可能になるのである。

特に，コーパスの検索・表示を行うコンコーダンスソフトを使えば，検索語を画面の中心に配した KWIC（Key Word in Context）表示が可能となり，キーワードの前後の文脈を効率的に閲覧しながら，当該表現の典型的特徴を視覚的に捉えやすい形で得ることができる。また，頻度はもちろんのこと，t-score や MI-score といった連語関係の強度をはかる指標となりうる統計的数値を活用すれば，これまでの感覚や直観に頼った研究方法では得られなかった科学的な裏付けを援用しながら研究分析を進めることができる。とりわけ，複数のシノニム表現について，その典型性の差異を具体的数値で概観できるようになる点は，その情報的価値だけではなく，研究効率を大いに高めてくれる。

コーパスを研究に活用する場合，「コーパス基盤的（corpus-based）」立場と「コーパス駆動的（corpus-driven）」立場がある。前者の立場は，特定の仮説について，その仮説が正しいかどうかをコーパスを用いて検証してゆくというもので，例えば Biber et al. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English* (Harlow: Pearson Education) は，Quirk et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language* (Longman: Harlow) の文法的枠組みに従い，コーパスを使って現代英語を検証したものである。後者の立場は，コーパスデータに触発されて，通常の言語直観による内省のみでは発掘することの困難な新たな言語事実を発見し，既成の理論にとらわれず一般化を試みるというもので，Hunston, S. and G. Francis (2000) *Pattern Grammar: A Corpus-Driven Approach to the Lexical Grammar of English* (Amsterdam: John Benjamin)，Tognini-Bonelli, E. (2001) *Corpus Linguistics at Work* (Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins)，Stubbs, M. (1993) “British Traditions in Text Analysis: From Firth to Sinclair,” in Baker, M., G. Francis and E. Tognini-Bonelli (eds.) *Text and Technology*: *In Honour of John Sinclair* (Philadelphia/ Amsterdam: John Benjamins, pp. 1–33)，井上永幸 (1995)「話し言葉における *many* について (1) —The Bank of English を使った分析—」『英語教育と英語研究』第 12 号（島根大学教育学部英語教育研究室，pp. 57–67），井上永幸 (1996)「話し言葉における *many* について (2) —The Bank of English を使った分析—」『英語教育と英語研究』第 13 号（島根大学教育学部英語教育研究室，pp. 43–63），井上永幸

(1997)「英語辞書編集とコーパスの可能性 —文法・語法の記述—」『英語教育と英語研究』第 14 号（島根大学教育学部英語教育研究室，pp. 43–61），井上永幸 (1998)「学習英和辞典における語法情報とコロケーション情報 —コーパスで何ができるか—」『英語教育と英語研究』第 15 号（島根大学教育学部英語教育研究室，pp. 71–86），井上永幸 (1998)「コーパスと統計資料 —新しい辞書編集へ向けて—」『小西友七先生傘寿記念論文集 現代英語の語法と文法』（大修館書店，pp. 20–28），井上永幸 (1999)「コーパスを使った語法研究と辞書編集」『英語表現研究』第 16 号（日本英語表現学会，pp. 50–60），井上永幸 (2001)「コーパスに基づくシノニム研究 —*happen* と *take place* の場合—」『英語語法文法研究』第 8 号（英語語法文法学会，pp. 37–53）などはその例である。

本研究は，コーパス基盤的な立場とコーパス駆動的立場の両者をふまえたものであるが，国内外において，特定の研究方法論に基づいて統一的に英語シノニム・語法研究を行った例はなく，この点に於いて申請者は 1995 年以来，一貫してコーパスの各種統計値を使った語法研究及びシノニム研究を行って，英語コーパス学会を始め，英語語法文法学会，英語表現学会などでもその成果を発表し評価されているところである。日本語母語話者の観点から，バランスを考慮して構築されたコーパスを適切に援用することによって，日本人英語学習者が当該のシノニム・語法を習得するにはどういった情報が必要となるのかを客観的に分析することができるようになるだけでなく，英語母語話者が見過ごしてきた種々の現象にも光を当てることが可能となるのである。

３．研究の方法

シノニム・語法研究をする際にどのような語句の組を設定するかは，研究そのものの質的な価値に関わるだけでなく，研究成果の英語教育における貢献度にも大きく関わってくる。従来のように研究の対象となる語句の組を恣意的に選択するのではなく，できるだけ現実のコミュニケーションにおける有用度や日本語を母語とする英語学習者（以下，学習者）が英語を学ぶ際の重要度を考慮して選ぶこととする。現実のコミュニケーションでの有用度を測るため，各種コーパスにおける頻度情報を活用し，高頻度でかつ学習者が誤り易かったり使いこなすのが難しい語句・表現のうち，従来その分析が十分でなかったものを中心に 12 組のシノニム・語法を選択する。

以上のような過程を経た後，当該項目について先行研究の調査を行う。幸運にも過去の論文に取り上げられたことのある語句の場合は，この段階である程度の情報が集まるが，論文で取り上げられたことのない語句の場合は，母語話者による 1 言語辞典が貴重な資料となる。とりわけ，EFL/ESL 向けの辞典は母語話者向けのものそれよりも記述が詳しく参考になる。もっとも，母語話者による辞典は母語話者の立場で書かれているので，非母語話者にとっては重要な情報でも母語話者にとって当然のことは説明記述が抜け落ちていることも多い。そのような中で最も非母語話者が当惑させられるのが，単なる言い換えによる定義記述である。たとえば, happen の定義として take place が与えられ, take place の定義で happen が用いられるといった方法である。日本の英和辞典や類義語辞典の編集はその記述の多くを英国や米国の EFL/ESL 辞典に依存してきたため，それらの辞典にシノニムに関する情報がない場合は，日本の英和辞典や類義語辞典でも十分な説明を得るのは難しい。「研究目的」でも述べたように，そのような語句について，学習者が受信や発信，特に発信の際に必要な情報を記述してゆくことを本研究では意図している。

先行研究の調査の過程で研究対象語句の問題点が明らかになってくる。Bank of English や Linguistic Data Consortium（LDC）から提供されている各種コーパスなどから抽出したデータを, TXTANA 等のコンコーダンスソフトを使って分析し，先行研究の内容を検証してゆくことになる。コーパスを使えば母語話者の直観による言語データを，非母語話者であっても居ながらにして分析対象とすることができる。インフォーマントテスティングにのみ頼る方法と違って，個人差を吸収することができるし，アンケート調査の際に生ずる質問の仕方による不都合を避けることもできる。アンケートのように質問を受けて様々な判断の後に出てきた結果ではなく，自然な状況で無意識のうちに行われた言語活動を分析対象とすることができることは大きな魅力である。

一方，コーパスがあるとは言え，キーワードの検索結果が数百を超える場合は，もはや人間の目だけに頼った分析は難しい。そのような場面で頼りになるのが各種統計値である。どのような語句が頻度が高く，どのような語句と語句の連結度が高く典型的なのかなど，直観や日常的な経験にのみ頼るのではなく，客観的で科学的なデータに基づいて検証できる。MI-score は，予想以上に共起した語に反応する。具体的には，特定の名詞を修飾する典型的形容詞，特定の名詞の述語となる動詞，特定の形容詞・動詞・前置詞を修飾する典型的副詞，特定の前置詞と連語する名詞，慣用句，ことわざ，複合語，専門用語など比較的独特の言い回しを構成する語がリストの上位に現われることになる。ただし，

MI-score のリストの上位にランクされていても，必ずしもキーワードとなる語の典型的な用法ではなく，検索対象となったコーパスまたはそのコーパス内の特定のサンプルに特有の連語であることも多い。一方，t-score は特定の 2 語の共起頻度に焦点をあてるため，キーワードの前後に頻繁に生起する機能的・文法的特性をもった語に目が向けられることになる。具体的には，特定の名詞と共起する限定詞・前置詞・接続詞，特定の形容詞と共起する前置詞・接続詞・不定詞，特定の動詞と共起する前置詞・接続詞・不変化詞・人称代名詞，特定の動詞分詞形・形容詞の前で用いられる be 動詞, 常套句や使い古されてしまった比喩，決まり文句などを構成する語などが上位にランクされることが多い。

コーパスを分析してゆくと，母語話者が行った説明記述でも実際の言語活動で行われている事実と異なっているということを経験することがある。たとえば，母語話者による複数の ESL/EFL 辞典で，take place は「計画された事などが起こる」場合に用いる旨が定義で示されているが，下に示すように，反例も散見される。

But that, of course, is not what is happening. The ocean is a gigantic chemical retort, in which thousands of complex and sometimes **unexpected** chemical reactions are **taking place** on a scale which defies comprehension. The impact of sunlight on sea water turns some of it into hydrogen peroxide: the bleaching agent which turns hair `Marilyn Monroe" blonde.
—Bank of English, Corpus: brbooks/UK. Text: BB-Lm90-744.〔斜体太字は申請者〕

母語話者による一般化を絶対視するのではなく，第三者の立場で冷静にデータに向き合うことが必要であろう。これにより，一般化の際に問題にすべきなのは「計画された事などが起こる」ということではないことがわかってくる。上で言及した統計値を活用してコーパスを再び眺めてゆくと，take place が生起する環境では高い確信度を表す助動詞や表現が特徴的に現れていることから，take place には「計画性」ではなく「発話者の確信度の強さ」という性質が関係していることが浮かび上がってくる。happen と take place の両者が近接する文脈に現れる用例なども検索して，happen は what や something などを始めとする -thing などで終わる不定代名詞と相性がよく，内容は漠然としたままで，ある出来事の生起の有無に焦点を当てた表現で好まれることが考察される。このような方法で，前もって設定したシノニム・語法に関する 12 項目について分析を行ってゆく。

４．研究成果

以下のような 12 項目について，研究・考察した。辞書や参考書における今後の対応が望まれる。

(1) NP is *do*ing [to *do*]

一般に to 不定詞は未来性を，動名詞は現実性を表すのに適すると言われるが，本項では NP is *do*ing [to *do*]のような構文に現れる NP の意味が〔NP は名詞句〕，後続する動詞の形に影響を与えていることを見た。すなわち，自分の趣味について語る My hobby is *do*ing [to *do*].の型では，通例すでに行為は日常的に実行されており，to *do* より *do*ing が好まれること。もっとも，dream のような名詞では，文脈によって *do*ing が用いられることもある。My big *dream* was *writing*. I'd been writing since I was very young. I wrote long and funny letters to my brother in the Army . . . 〔be 動詞が過去形であることに注意〕は，インタビューで政治家が過去を振り返る場面であるが，当時すでに物書きのまねごとを始めていたことを特に意識して doing の形が用いられたと思われる。しかしながら，dream でも，be 動詞の時制にかかわらず to *do* が続く形が一般的であることに変わりはない。

通例 to *do* が続くもの：the [one's] aim, the alternative, the challenge, the first [second], one's [the] goal, the idea, one's intention, one's mission, the object, one's objective, one's orders, the plan, the purpose, the solution, etc.

通例 *do*ing が続くもの：one's hobby, etc.

to do/doing のいずれも可能だが，to do の方が優勢なもの：the answer, one's [the] job, the key, the point, the trick, etc.

to do/doing のいずれも同程度用いられるもの：the problem, the secret, the thing, etc.

(2) there's/there're

存在を表す there 構文では，there is の短縮形である there's の形が意味上の主語の単複に関わらずよく見られ記号化が進んでいることがよく指摘されるが，複数主語に対応する there are の短縮形である there're の形は，複数主語にも対応できる there's の簡便さの影響か，非短縮形の 100 分の 1 にも満たず，記号化の点においては there's の足下にも及ばないことを見た。

(3) a little (bit), a bit, slightly と肯定的動詞

Jill likes a little [slightly].が不自然に聞こえるように〔cf. Minton (2002)〕，否定的評価を表す語と共起することが多い程度副詞の a little (bit), a bit, slightly であるが，You may get into it, and you may *like* it *a little bit* more than you think.のように比較級を修飾する場合，I want us to get to *know* one another *a little*.のように変化を暗示する場合，I know that you *only like* me *a little bit*, but I like you a lot and I do not want you to die.のように only を含んで否定的暗示がある場合，I hadn't decided if I actually liked Michael or not, and when I decided

that I *did like* him *a little bit* I couldn't put my finger on why.のように強意を含む場合などは肯定的動詞とも用いられることを見た。

(4) it is 形容詞/名詞 (for A) to *do* の型における for A の出没

教育現場では it is 形容詞/名詞 (for A) to *do* という基本形で教えられる不定詞構文であるが, for A の出没は文脈から類推できない場合に限られ，全体の 1 割程度であることを見た。

(5) do it/do that/do so

代用表現である do it/do that/do so などについて，do it/do that は You can't *do that* [*it*].におけるように積極的に禁止･許可･意志･必要性について述べる場合に, do so はややかたい言い方で, She did not want to see him, and *did so* as little as possible.におけるように命令･助言などにただ従う場合や消極的あるいは二次的で何気ない行為について述べるときに好まれることを見た。

(6) as in . . .

In science *as in* manufacturing, quality control filters the good from the bad.のような様態を表す as in の延長線上には少なくとも，Food stripped of its nutritional value—*as in* fast food, refined foods, frozen foods, processed foods, etc.—is highly imbalanced and therefore creates an imbalance in our bodies.のように例を挙げるときに「(たとえば) …みたいに」の意で理解を助けるための単なる例示機能に変化した用法と，話し言葉で，聞き手との共通知識を前提に，"Colonel Jack O'Neill, Jacob Carter." "Carter? As in . . . ?" "As in, my father Sir, yes." のように，特定の事項の回顧を促進させようとする用法が認められることを見た。

(7) come to [into] NP

特定の状態への移行を表す come to [into] NP において，to は，come to terms（合意に達する），come to an end（終わる），come to conclusion（結論に達する）など，最終到達状態を意識する表現となる場合に好まれるのに対して，into は，come into force [effect]（〈法律などが〉発効する），come into play（機能し始める），come into existence（生まれる）など，物事の開始を意識する表現となる場合に好まれる傾向があることを見た。

(8) from/since . . . ago

since . . . ago の形は，以前から語法書などでも避けるべき形として取り上げられているが, from . . . ago の形にはほとんど言及がない。この形は，This is (little changed) *from* two weeks *ago*.［区別・比較］や The photos are *from* years *ago* when I was thin.［出所・出典］などのように，いくつかの用法の from と . . . ago が一緒に用いられたものであることを見た。

(9) to 不定詞に現れる進行形

to be *do*ing の形は，どのような文法環境にも平均的に現れるのではなく，When we approached the aircraft, we couldn't believe we *were* actually *going to be boarding* it. / The average age of first parenthood *seems* if anything *to be falling*. / It's called Pocket TV because we'*re* all *supposed to be watching* video on our telephones these days, . . . / You always *have to be seeking* improvement.のように，be going to *do*, seem to *do*, be supposed to *do*, have (got) to *do* など，準法助動詞的なものの後に続くことが多いことを見た。

(10) It was [is] the first time (that) . . . と That was [This is, This was] the first time (that) . . .

It was [is] the first time (that) . . .（…するのは初めてであった［ある］）では主節の動詞は現在形と過去形のいずれも可だが過去形が 6 割以上，That was [This is, This was] the first time (that) . . .（…したのはそれが初めてだった［これが初めてだ，これが初めてだった］）では，主語が this の場合，主節の動詞は現在形と過去形のいずれも可能だが現在形のことが多いのに対し，主語が that の場合，主節の動詞は通例過去形であることを見た。ちなみに，This is *my first time to* visit London.は非標準的な用法として時に見られるが，避けた方がよい。

(11) it is NP (for NP) to *do*

It's easy (for me) to make mistakes. や It's a pleasure (for us) to be here. といった用例で知られる it . . . to 不定詞構文であるが，基本的にこの構文は話し手・書き手の判断・評価を表すため，その機能に応じた形容詞や名詞を it is の後に伴うことになる。比較的頻度の高い形容詞の difficult, hard, easy, (im)possible, important などはよく取り上げられるものの，名詞については，EFL/ESL 向け参考書で重宝される fun, a pity, a pleasure, a shame〔Alexander 1988〕などでお茶を濁す程度の扱いがほとんどである。ところが，これらの名詞はこの構文における出現頻度においては必ずしも上位ではないため，学習効率・満足度の点では再考が必要である。コーパスを分析した結果では，It is a *good thing* for a man to have nothing to do with women.といった ADJ + thing が圧倒的に上位に現れ〔ADJ は形容詞〕，その半分弱の頻度で ADJ + idea，4 分の 1 程度の頻度で ADJ + practice，(ADJ +) mistake, (ADJ +) matter などが続く。特に汎用的な名詞の thing が前に多様な形容詞を伴って幅広い表現で用いられることは注目に値し，学習による表現力の飛躍が大いに期待できる。

(12) especially/ specially/particularly

いずれも日本語では「特に」という訳語が与えられることが多いが，especially は，総称的表現で一般化した後，典型例を示すのに用いられ，特に前置詞や接続詞が続く場合に好

まれる。また，形容詞・副詞・動詞の前で程度を強める際にも用いられる。specially は主に特定の目的を意識して行われた行為に言及する際に用いられる。また，くだけた文脈では時に especially の目的・用途・人を意識した用法と区別なく用いられることがある。さらに，様態を表すのはこの語のみである。なお，頻度の点では，specially は especially の 1 割程度しか使われていない。particularly も especially の目的・用途・人を意識した用法と区別なく用いられることがあるが，形容詞・副詞・動詞の前で程度を強める際にも用い，その場合，否定文でも好まれる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
①井上永幸「コーパスを活用した英語シノニム・語法研究 —*quiet* と *silent*」,『人間科学研究（広島大学大学院総合科学研究科紀要 I)』〔査読有〕，第 5 巻，2010，1–23

②井上永幸「辞書編集におけるコーパス活用」,『英語語法文法研究』（英語語法文法学会編）〔査読有〕，第 17 号，2010，5–22

③井上永幸・山本康一・鹿島康政「『用例コーパス』を使った語彙指導・学習」,『HYPERION』（徳島大学英語英文学会），第 55 巻，2009，17-36

〔学会発表〕（計 10 件）
①井上永幸「コーパスを活用した 英語シノニム・語法研究 —it is (名) for A to do 構文について—」，第 14 回 JACET 英語辞書研究会ワークショップ（年次研究発表大会），2013 年 3 月 15 日，早稲田大学.

②井上永幸「コーパスを活用した英語シノニム・語法研究 —*whether* と *if*—」，Lexigram 研究会（名古屋大学），2011 年 7 月 9 日，(名古屋大学大学院国際開発研究科.

③井上永幸〔招聘〕「コーパスを活用した英語シノニム語法研究と辞書編集」，第 20 回広島大学外国語教育研究センター 外国語教育研究集会，2011 年 3 月 4 日，広島大学.

④井上永幸「コーパスを活用した英語シノニム・語法研究 —*silent* と *quiet*—」，Lexigram 研究会（名古屋大学），2011 年 1 月 8 日，名古屋大学国際開発研究科.

⑤井上永幸〔招聘〕シンポジウム「文法研究資料としてのコーパスデータの批判的検討」，「辞書編集におけるコーパス活用 —意味・用法の同定をめぐって—」，日本英語学会第 28 回大会，2010 年 11 月 14 日，日本大学.

⑥井上永幸〔招聘〕辞書編集におけるコーパス活用，シンポジウム「大規模コーパスを英語研究に有効利用するための留意点について」，英語語法文法学会第 17 回大会，2009 年 10 月 24 日，龍谷大学（大宮学舎）.

⑦井上永幸「辞書編集とコーパスを活用したシノニム研究 —*alive* と *living*—」，Lexigram 研究会（名古屋大学），2009 年 9 月 18 日，名古屋大学大学院国際開発研究科.

⑧井上永幸〔招聘〕セミナー「英語辞書と語彙指導」:「『用例コーパス』を使った辞書指導と語彙指導」，e-Learning 教育学会，2008 年 12 月 13 日，大阪大学（豊中キャンパス）.

⑨井上永幸〔招聘〕シンポジウム：英和辞典とコーパス「『ウィズダム英和辞典』（第 2 版）：Corpus-Based から Corpus-Driven へ向けて」第 31 回英語コーパス学会，2008 年 4 月 26 日，摂南大学.

⑩井上永幸〔招聘〕ワークショップ「『用例コーパス』を使った英語指導・学習《大学編》」，第 31 回英語コーパス学会，2008 年 4 月 26 日 摂南大学.

〔図書〕（計 2 件）
①井上永幸・赤野一郎〔共編〕，三省堂，『ウィズダム英和辞典』第 3 版，2013．2240.

②井上永幸〔共著〕，松柏社，『コーパスと英語教育の接点』，2008, 45–63

６．研究組織
(1)研究代表者
井上　永幸（INOUE NAGAYUKI）
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号：10232547

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：